

石井 啓一郎（いしい けいいちろう）

一九六三年一月十五日、東京生れ。上智大学外国語学部イスパニア語学科卒業。大学時代はスペイン古典文学を愛しながらも、イスラム世界に惹かれるまま、気付けば「アル・アンダルス」から地中海を東へ東へと中東・西南アジアへと遍歴を続けていた。いつしか企業勤務の傍らで、イラン、トルコ現代文学の翻訳研究を「好きの一念」「下手の横好き」だけで続けて五十代も目前に迫る身となる。最近ではイラン、トルコに加えて、両者の周縁部分あるいは交差点としてのアゼルバイジャンを現代文学やフォークロアといった視点から並べて扱えるか、というテーマに興味をもって模索中。

訳書に「サーデグ・ヘダーヤト『生理めくある狂人の手記より』（国書刊行会、二〇〇〇年）、「サーデグ・ヘダーヤト短篇集」（慧文社、二〇〇七年）、ナズム・ヒクメット『フェルハドとシリン』（慧文社、二〇〇二年）、その他スィーミン・ダーネシヴァル「私は誰に挨拶しよう」（『すばる』二〇〇八年12月号）等、文芸誌・学術誌へもイラン、トルコ文学作品を積極的に翻訳寄稿している。著書に『マルチンガルの外国語学習法』がある翻訳家の「語学」心覚え〜『扶桑社新書、二〇一〇年』。

石川 清子（いしかわ きよこ）

もともとフランス文学専攻で、シュレアリスマやヌーヴォー・ロマンの作家が好きでしたが、一九八〇年代の終わり頃、シエラ・ハレット（当時「シエラ」がついていた）の美声に誘われ地中

海の向こう側に興味をもち、北アフリカの仏語作家を読み始め現在に至っています。ゴンクール賞受賞前のタール・ベン・ジェルーンを導きの糸として今、アジア・ジバール、レイラ・セパールの女性作家の周囲を追いかけています。のめりこんだおかげでベン・ジェルーン『不在者の祈り』（国書刊行会）、ジバール『愛、ファンタジア』（みすず書房）を訳すことができました。翻訳を出すことは日本における研究を根づかせる意味で大切ですが、創作と同等の価値ある仕事だと思っています。今、訳してみたいものは、北アフリカの作家もたくさんありますが、十六世紀のフランス、ブレイヤード派の詩人、ジョアシャン・デュベレー、アンドレ・ポルトンの草分け的研究者であったマルグリット・ポネの評論などでも、ジバールの次の翻訳を出すのがまず先でしょう。

磯部 加代子（いそへ かよこ）

一九七三年生まれ。一九九九年から二〇〇一年までトルコのイスタンブール在住。二〇〇二年から二〇〇五年まで日本のトルコ企業に勤務。二〇〇三年より日本のクルド人難民たちの通訳を行う。二〇一二年「クルド文学研究会」を立ち上げる（どなたでも参加できます。興味のある方はお気軽に磯部までご連絡ください。kakoi118@ytdohne.jp）。

トルコ語を学び始めた当初よりトルコのクルド問題に関心を抱く。イスタンブール在住時には、クルド人問題のトルコにおける抜き差しならない根深さを知るも、日本でこの分野での研究がほとんど存在しないことに愕然とする。クルド人作家として抜群の知名度を誇るメフメッド・

ウズン、ノーベル文学賞候補に幾度となくあがるもまた受賞歴のない文豪ヤシャル・ケマルらはもちろんのこと、スザン・サマンジュヤ、ヤウズ・エキンジなど、それぞれに限りない読書の喜びを味わわせてくれるクルド人作家たちに出会い、これらの作品を一人で味わうことの寂しさを解消したく「クルド文学研究会」を発足、「クルド文学」を言語や国境で区切ることなく広く定義し、その魅力、困難、情熱を日本に紹介していきたい。

著書に『旅の指さし会話帳18 トルコ』（情報センター出版局、二〇〇一年）。訳書にオルサー・ラマザン『魂の視線』光の教師からあなたへ 真実のメッセージ』（高木書房、二〇一一年）。

鶴戸 聡（つんど さとし）

南九州出身。東大駒場に干支が一回りするほど学んでようやく博士号を取得（地域文化研究専攻）。学位論文はアルジェリアの作家を論じた「コスモグラフィ」としてのカテブ・ヤシン作品―アフリカ性と民衆の詩学」。マグレブやレヴァントの仏語文学を主に研究してきましたが、アルジェリアのアラビア語小説の紹介が目下の課題。地域としての仏語圏を軸にして、東アジア（台湾・朝鮮）との比較を交えつつ、アラブ・ベルベル文学を多言語的に理解して行きたいと考えています。なおアルジェリア独立50周年を機に「マグレブ文学研究会」を立ち上げました。会員随時募集中です。

雑文は方々に書き散らしていますが、専門的な興味をお持ちの方は「アラブ・フランコフォニーと越境の詩学」土屋勝彦「反響する文学」（風媒社、二〇一一年）などご覧下さい。ハンガ

リーのチャイナ・ファンタジーも翻訳しているのでそちらもヨロシク(『時間はだれも待ってくれない』東京創元社、二〇一一年)。

岡 真理 (おかまり)

一九六〇年生れ。専門は現代アラブ文学。東京外国語大学アラビア語科でアラビア語とアラブ文学を学び、学部四年のときにエジプト・カイロ大学に留学(一九八二・八三年)。修士課程修了後、一九八八年から九一年まで、在モロッコ日本国大使館に専門調査員として三年ほど勤務しました。現在は、京都大学大学院人間・環境学研究所の教員として、アラビア語と、ポストコロニアル思想文化の一環として、パレスチナ問題を教えています。

学部生のとき、ガッサーン・カナファアーニーの『太陽の男たち／ハイファに戻つて』を読んで衝撃を受け、文学を通してパレスチナ問題を考えたいと文学の道を目指しました。翻訳は、『季刊 前夜』(二〇〇四・二〇〇八年)にカナファアーニーの短編および『ハイファに戻つて』の新訳を連載。ほかにターハル・ベン・ハジエルーン『火によつて』(原作仏語、以文社、二〇一二年)など著書に『アラブ 祈りとしての文学』(みすず書房、二〇〇八年)ほか。

勝田 茂 (かつた しげる)

大阪大学言語文化研究科教授。トルコ農村文学に興味関心があり、『トルコの村から』(M.Mokki:Bizim Köy,1960)を共訳して三〇年が経ちました。先日、トルコの古書店をネット検索して、いましたら、同 Bizim Köy は18版(二〇一

二年)も重ねており、少し驚きました。いまだに根強い需要がある証でしょうが、どういう形で読みつがれているのか興味をそそられます。そのおりに偶然ですが、別著者(C.Bogaz)による同一タイトルの短編 Bizim Köy の存在に気づきました。しかもそれは、マカルの Bizim Köy に先立つ一九四八年の出版であり、さっそく発注しました。発掘された Bizim Köy を少しばかり興奮気味に待っています。

鈴木 珠里 (すずき しゅり)

東京外国語大学地域文化研究科博士課程前期修了。イラン現代文学における女性詩人の作品を中心に研究。大東文化大学国際関係学部・中央大学総合政策学部非常勤講師。主な出版物として、『古鏡の沈黙』(ジャレール(アーラム)タージ・ガーエムガミー)著・共訳・未知谷、二〇一二年)、『現代イラン詩集』(共編訳・土曜美術出版販売、二〇〇九年)、『イランを知るための65章』(共編著・明石書店、二〇〇四年)。

平寛多朗 (たいいら かんたろう)

カイロ・アメリカン大学の修士過程での留学を終え、現在、東京外国語大学博士後期課程に在籍中。アラブ・アラビア語文学、特にエジプトの文学に焦点を絞り研究を行っている。

田浪 亜央江 (たなみ あおえ)

学部時代のシリア留学と数回のパレスチナ被占領地の訪問を経て、「敵」の関係にあるイスラエルの社会内部を理解したいと意を決し、大学

院時代にイスラエルに留学。以来イスラエル国内に住むパレスチナ人の文学や、演劇など言語を用いた表現活動に関心をもってきた。最近はまだ被占領地に関心が戻っており、イスラエルに入るのが億劫なきことが悩みである。現在は複数の大学で非常勤講師として中東政治社会論やイスラーム社会論などを教えている。著書に『不在者』たちのイスラエル 占領文化とパレスチナ(インパクト出版会、二〇〇八年)がある。

中村 菜穂 (なかむら なほ)

一九八一年生まれ。東京外国語大学地域文化研究科博士後期課程在籍。イラン現代文学専攻。二〇世紀の詩人ナーデル・ナーデルプールを出発点として、ペルシア古典文学と現代文学との接点を主な研究テーマとしている。また、ペルシア語による豊かな想像力と鋭い洞察の現われた詩や小説を翻訳することを目指している。寄稿『イランとイスラーム』(森茂男編、春風社、二〇一〇年)、共訳書『現代イラン詩集』(新・世界現代詩文庫)(土曜美術社出版販売、二〇〇九年)、ジャレール(アーラム)タージ・ガーエムガミー『古鏡の沈黙』(ザフラー・ター(ヘリー)解説、未知谷、二〇一二年)。

福田 義昭 (ふくだ よしあき)

一九六九年生まれ。大阪外国語大学大学院言語社会研究科博士後期課程修了。アラビア語・アラブ文学。二十代のころ、エジプトのカイロに二年弱、シリアのダマスカスに二年ほど住みました。両国に大きな愛着を感じていますが、いろいろあって、読んでいる文学作品はエジプト

に偏りがちです。一言で言うと、エジプトを中心にアラブ世界の近代文学に関心を持ってきた、ということになります……。最近、アラブの言語文化に関するのなら何でもいいかとも思うようになってきました。趣味で、戦前から戦中にかけて地元の神戸に暮らしていた外国人ムスリムのことを調べています。

藤元 優子 (ふじもと ゆうこ)

留学中にイラン革命に遭遇し、全学ストの暇に飽かせて書店巡り、手に取った小説がきっかけで現代文学の世界に足を踏み入れることになりました。第一歩はジャラル・アール・レリアフ・マドという社会派作家を扱いましたが、ここ十年ほどは元気な女性作家群に焦点を当てて研究してきました。若い同僚たちと『すばる』(二〇〇八年12月号)に「イラン女性文学」特集を組むことができたのが、これまでに最良の仕事でしたが、新たに「イラン女性作家短編集(仮題)」を、段々社の「現代アジアの女性作家秀作シリーズ」の一冊として出版する提案を頂きました。今回は一人で、アラストゥイーの「アトラス」を含む、七人の女性作家の作品を翻訳します。二〇一三年度中に上梓する計画です。で、お楽しみ！

細田 和江 (ほそだ かずえ)

中央大学大学院総合政策研究科総合政策専攻博士後期課程修了・博士(学術)中央大学政策文化総合研究所・准研究員、早稲田大学イスラーム地域研究機構・招聘研究員のほか、民族学博物館と京都大学地域研究統合情報センター(CIAS)の共同研究員もつとめる。

専門はイスラエル文学・文化で、特にイスラエル内部の周縁的な文化全般に興味がある。主にイスラエルのアラブ人作家の(ペライ語小説の研究を行なっているが、今後はアラブ系のユダヤ人作家の文学にも言及していくつもりである。

前田 君江 (まえだ きみえ)

イラン・ペルシア語文学を専攻。東京大学非常勤講師。研究テーマは、イラン現代詩の「ニュー・ポエトリー」概念、詩人たち(ニーマー・ユーシージ、アフマド・シャームルー、アフマド・レザ・アフマディー、ソフラーブ・セペフリー)、イラン映画と文学、童話と絵本(アフマド・レザ・アフマディー)、ペルシア語俳句、「現在の」イラン詩人たち。

近年の論考・エッセイとして、「革命とリフレイン——一九七九年のシャームルー詩」この行き止まりで「の受容と技法」『オリエント』五五/二号(二〇一三、掲載予定)、「ペルシア語訳『法華経』とホウゼ発の仏教講義・仏教書」『オリエント』五四/二(二〇一一)、共訳に『現代イラン詩集』(新・世界現代詩文庫8、土曜美術社出版販売、二〇〇九)、「ペルシア猫を誰も知らない」を書いた発禁小説家(詩誌『ミテ』web エッセイ、二〇一〇)

前田 弘毅 (まえだ ひろたけ)

イラン・サファヴィー朝史、グルジア史専攻。首都大学東京・都市教養学部准教授。近年の著書として、『イスラーム世界の奴隷軍人とその実像——17世紀サファヴィー朝イランとコーカサス』(明石書店、二〇〇九)、『グルジア現代史』(東洋書店、二〇〇九)、編著に『多様性

と可能性のコーカサス——民族紛争を超えて』(北海道大学出版会、二〇〇九)、共編著『コーカサスを知るための65章』(明石書店、二〇〇六)。グルジア文学に関わる論考・翻訳として、「グルジアで語り継がれる伝統：ギオルギ・ツォツァニゼ作『熊』」(月が語ったこと：グルジア国民詩人と日本に関する小エピソード)いづれも『地政学プロジェクト平成21年度報告書』(大阪大学世界言語研究センター、二〇一〇)。ほかに、「Kay Kostrow Khan」, Encyclopaedia Iranica (Online edition), 2008「Kartvebi Sepanra Iranshi」, Tolisi Artanuji, 2008(『サファヴィー朝イランのグルジア人』、グルジア語)など。

三谷 恵子 (みたに けいこ)

専門は言語学、スラヴ語学。二〇一二年度まで京都大学人間・環境学研究科教授、二〇一三年度より東京大学文学部・人文社会系研究科教授。言語の形式と意味の関係について、スラヴ諸語を中心に多角的に研究中。また中・東欧の言語文化、とくに旧ユーゴスラヴィアの言語と地域、社会、文化の関わりにも深い関心をもつ。文学研究は専門外だが、言語研究の中で翻訳という作業をとらえ、これにも積極的に関わっている。これまでの訳書にS・ドラク・リッチ『バルカン・エクスプレス』(三省堂、一九九五年)、M・パウイッチ『帝都最後の恋』(松籟社、二〇〇九年)がある。またユーゴ時代のボスニアを代表する作家M・セリモヴィッチの長編『修道師と死』をまもなく刊行の予定(松籟社、二〇一三年予定)。

宮下 遼 (みやした りょう)

一九八一年、東京都生まれ。東京大学大学院単位修得退学。二〇一三年度より日本学術振興会海外特別研究員。専門はトルコ社会史、文学(史)。訳書にオルハン・パムク『白い城』(藤原書店、共訳)、『無垢の博物館』、『わたしの名は赤(新訳文庫版)』、『雪(新訳文庫版)』(以上、早川書房)。中東現代文学研究会に参加させていただき、オルハン・パムクやヤシアル・ケマル、ナズム・ヒクメットのような巨人の前でかすみ、普段であれば決して邦訳されることのないトルコのモダニズム小説と歴史小説を紹介することができ、望外の喜びを噛みしめています。いずれ、一作家についての定点的な紹介に留まらぬ、包括的な見地からトルコ文学の世界を紹介したいと願ってやみません。

村上薫 (むらかみ かおる)

アジア経済研究所研究員。専門はトルコ地域研究。福祉、家族、ジェンダーに関心があり、イスタンブールの貧困地区でフィールド調査をしています。二十代後半だった留学時代、ひとまわり年上の「トルコの姉」は私の行末を案じ、「スカートは短く、化粧は濃く、口数は少なめに(Kısa etek, bol makyaj, az konuşma)」と口を酸っぱくして注意してくれたものでした。が、ビュルールへの道はやはり遠かったです。

森 晋太郎 (もり しんたろう)

一九六七年、福岡県生まれ。アラビア語通訳・翻訳者、東京外国語大学非常勤講師。シリアのダマスカスに一九八九年から二年間、レバノンのベイルートに一九九九年から二年間留学。この二つの国を中心にアラブ近現代文芸に

関心を持っている。

山本 薫 (やまもと かおる)

アラブ文学研究。東京外国語大学ほか非常勤講師。一九八九〜九〇年シリア留学、一九九七〜二〇〇〇年エジプト留学等を経て、二〇〇二年に『前イスラーム期アラブの盗賊・無頼詩人サアリーク：逆転世界のヒーロー』で東京外国語大学より博士号(文学)取得。訳書にエミール・ハビービー著『悲楽観屋サイドの失踪にまつわる奇妙な出来事』(作品社、二〇〇六年)。主要な著作に酒井啓子編『アラブ大変動』を読む『民衆革命のゆくえ』(第二章社会・文化運動としてのエジプト。一月二五日革命)：グラフィクス・映像・音楽の事例から「他部分執筆。東京外国語大学出版会、二〇一一年)、『アラビア語新聞を読み解くために』(一読解と翻訳の手引)(東京外国語大学中東イスラーム研究教育プロジェクト、二〇一〇年)、『ハイファの作家、エミールハビービー：都市の記憶としての文学』(日本中東学会年報 No. 23・2)(二〇〇八年一月)など。

山根 美奈 (やまね みな)

イタリアへは一九七一年から通い始め、後に黄金時代と言われる八〇年代前半には四年間ミラノに在住し、イタリア式衣食住を謳歌した。しかし、EUの一員となってからはその旨みが半減したと残念に思っている一人である。京都大学大学院では「イタリアにおける現代の移民」を研究テーマとしているが、そのきっかけとなったのが、今回翻訳した『サルシッチャ』を所収した選集『黒い羊たち(Peopre Nere)』を

手にしたことだ。出版間もないこの一冊を、ミラノの運河沿いで骨董屋を営む友人が、読後に「読みやすい」と渡してくれた。ソマリアの他に、インド、エジプト出身女性のエッセイが収められており、どれも会話的で平易な文は、大方読み取れたが、その行間を埋める現実を理解できるようにしたのは大学院へ入ってからのことだ。初刷わずか千部か二千部の中の一冊を端緒として現在に至っていることを思うと感慨深い。

現在は、二〇一〇年に、「移民文学二〇年」を記念して開催されたポロニーニャでの学会の論文集を読んでいる。島根県生まれ、六十七歳。

中東現代文学研究会 編
中東現代文学選 2012

2013年3月21日

編集協力 : 鶴戸聡、仁子寿晴

表紙デザイン : 岡本多平

連絡先 : 中東現代文学研究会

606-8501 京都市左京区吉田二本松町

京都大学大学院 人間・環境学研究科

岡 真理研究室

tel/fax 075-761-6641

印刷・発行 : (株)コームラ

* 本文学選は、科学研究費補助金基盤研究(C)「中東現代文学における「ワタン(祖国)」表象とその分析」
(2012-2014年度、研究代表者:岡 真理)の成果の一部です。

ISBN 978-4-904767-21-4